

葉が枝先に3枚ずつ出ているところから名づけられた「コバノミツバツツジ」。背は少し高く、花は直径約3cmの小ぶり。上品に春を彩る。

巻頭特集

咲き誇る可憐な花々、人々の思い 宮山つつじ園

豊中市の『つつじの杜 春日神社』の裏にある『宮山つつじ園』。毎年開花を楽しみにしているファンは多い。ツツジの育成・管理を行う『宮山つつじ保存会』に話を聞いた。

華やかな春が待ち遠しい
地元民が一丸となり花を育てる

暖かな春の日差しが心地いい4月上旬、「宮山つつじ園」に一步入ると、そこには幻想的な景色が広がる。ウグイスがさえずり、少し小さめの濃いピンクや淡い紫色の「コバノミツバツツジ」約1000本が惜しみなくふんだんに咲いている。整備された遊歩道を進んでいくと、満開のツツジにみとれるのはもちろん、グイッとせり出した自然のままの姿や、子どもたちが「ツツジのトンネル」と言って楽しめそうな場所を見つけることができる。

このように毎年ツツジが美しく咲くのは地元住民の日々の活動にある。「大変なこともあるけど、みんな協力してやっている」と話してくれたのは「宮山つつじ保存会」の竹原修会長だ。

住民でつくる保存会のメンバーが毎月数回、枝打ちや水やりといったケアを定期的になしている。数メートルもある高い木を切る場合は若者の力を借り、大きな木を伐採する時には近隣に配慮して行うなど、地元民ならではの助け合いや気配りが印象的。

移ろう時代の中で失われた花々
鎮守の森を復活させたい

同園のツツジは、江戸時代、この地の領主であった「安部撰津守」が植栽したとされる由緒あるもの。

竹原会長が宮山のツツジに関する戦前の新聞を大切に保管していた。そこには「大阪府の天然記念物指定候補地に選ばれたつつじの名所」や「桃源のよな花の村」といった言葉が並ぶ。この頃の宮山町は、春になると弁当を携えた花見客でにぎわう名所として知られていたようだ。しかし戦後の生活の変移や燃料の確保、照葉樹が生い茂ると

いう環境の変化に伴い、山一帯のツツジの多くが枯れてしまった。そこで豊中市が40年ほど前に地元住民の協力を得て、昔の光景を取り戻そうとツツジを植え、育てる取り組みを開始した。こうして数年後には一般公開ができるまでになった。

いた当時は同園の存在を知らなかったという。しかし今では保存会の会長を務め、「毎年小学校の同級生たちも花見に来てくれるんですよ」と笑って話す。ツツジやこの大きな森を守り、園を人々に広めたいという思いの強さを感じた。

笑顔いっぱい10日間
俳句をたしなむこともできる

『宮山つつじ園』は毎年開花の時期に合わせて一般公開(無料)される。今年は4月1日から始まる。

花の香りを感じながらの散歩、ウォーキング、写真撮影、写生など楽しみ方は様々。遠方、近隣問わず数多くの人々が訪れ、なんと例年約3000人の来園者があるというから驚きだ。「今年の花は去年と咲き方がまた違うわね」と話すおなじみの常連さんもあるほど。隣の「春日神社」も4月1日に「春祭」・「英霊慰霊祭」が執り行われるので、この日は多くの人が参拝に訪れ、同園も一層のにぎわいを見せる。

また、一般公開の時に目を引くのは、枝に吊るされた短冊。よく見ると、幼い子どもの文字や達筆な文字で「俳句」がしたためられている。すべて来園者の作品だ。訪れた際にはぜひチャレンジしてほしい。というのも、これらの作品は閉園後にすべて回収し、その中からいくつか抜粋。それを5年ごとに本にして残しているという。その年々の想いがつまった一冊であることは間違いない。



1 虫たちにとっても春は心躍る季節

2 手書きの文字から思いが伝わる来園者の俳句

3 短冊用に雨除けのビニール袋を置いてくれているのは嬉しい気遣い

4 遊歩道を抜けるとベンチもあり、憩いの場に。一息つきながらお花見を



宮山つつじ園 一般公開

- 開催期間 4/1(土)～4/10(月) ※10日間
- 開園時間 9:30～16:00 入園料 無料
- 場所 豊中市宮山町1丁目地内
- アクセス 大阪モノレール「柴原駅」徒歩15分
阪急バス「宮山停」徒歩3分
- 問い合わせ 豊中市 環境部 公園みどり推進課
TEL.06-6843-4000